

専任教員教育研究業績

平成28年 6月29日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
野津 直樹	のづ なおき	保育学科	学科長 教授・ 准教授 ・講師・助教	男・女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
保育者論、環境指導演法、保育・教職実践演習、教育実習、教育実習指導、ゼミナール、(通信課程…特例：保育者論、環境指導演法、職業と社会Ⅰ)			FD委員会	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項		学位	
H9(1997)年3月	関東学院大学法学部法律学科卒業		学士(法学)	
H12(2000)年3月	玉川大学大学院文学研究科教育学専攻修了		修士(文学)	
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
学校法人なかい学園	H9年4月～H20年3月	ぬるみず・毛利台・森の里幼稚園総務、平成14年より教務主事		
学校法人小田原女子短期大学	H20年4月～H26年3月	保育学科 助教		
学校法人三幸学園 小田原短期大学	H26年4月～H28年3月	保育学科 講師		
学校法人三幸学園 小田原短期大学	H28年4月～現在	保育学科 准教授		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
財)幼少年教育研究所	H15年4月～現在	所員		
日本児童学会	H18年4月～現在	会員		
こども環境学会	H25年4月～現在	会員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
社)神奈川県私立幼稚園連合会	H12年4月～H20年3月	研究部部員として活動。		
厚木市教育研究所	H18年4月～H20年3月	囑託委員として活動。「家庭教育に関する調査研究」		
子育て支援フェスティバル 実行委員長	H22年4月～現在	小田原市内で子育てを応援している団体で実行委員会を組織している。その委員会で委員長として活動。		
森の里公民館	H22年4月～現在	地元の公民館の運営委員として活動。		
小田原私立幼稚園協会研究会 講師・助言者	H26年5月～H28年3月	小田原私立幼稚園協会より講師依頼。テーマは「環境を再考する～いつもの保育から環境を切り取る～」2年継続。		
小田原市立幼稚園教育研究会 講師・助言者	H27年4月～H28年3月	小田原公立の幼稚園より講師依頼。公開保育研究会の講師・指導助言者として活動。1年間を通して下中幼稚園の保育指導も兼ねている。		
御殿場市幼児の教育・保育施設 整備基本構想策定委員	H27年7月～H28年3月	御殿場市子ども育成課から委員依頼。		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
中学校教諭専修免許(社会)	H12年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭専修免許(公民)	H12年3月	東京都教育委員会		
研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論文等の名称 (著書)	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
1. 保育内容「環境」	共著	H22年3月	大学図書出版	幼稚園教育要領・保育所保育指針の内容・環境の狙いと内容を反映した章立てとなっている。全206頁。 監修：無藤隆 編著者：無藤隆、中坪史典、後藤範子 共著者：吉葉研司、松寄洋子、金子仁人、野津直樹、福田きよみ、齊藤恵美子、佐藤英文、丹野禰子、佐藤康富、伊藤匡、降旗信一 担当部分：「第6章 自然環境とのかかわり」(p.65～

2. 保育実習－幼保一元化に向けて－	共著	H24年3月	青踏社	<p>p.79, p.180～p.182)を単著。 本書を手取る学生たちこそ、子どもと自然がかかわりあう時間を一緒に過ごすパートナーであり、その自然との出会いをより味わい深いものとする。下記の節は、子どもと出会うあらゆるモノである。それらと子どもが出会う時に、学生が(保育者となった時に)何に注視してその出会いをより味わい深いものとするかについて述べていった。 1 自然とかかわる(天体・気象・地表など) 2 季節とかかわる(食材など) 3 動植物、小動物とかかわる(植物・虫・小動物など) 4 生き物を飼育する(命の尊さを知る)</p> <p>実習準備のために書かれたテキストであり、多くの養成施設で学生と教員が行き当たる実習の最初のハードルを越える手助けをすることを目的として作成された。全136頁 編著：吉田眞理 共著者：吉原美弥子、木内英実、野津直樹</p>
3. 高校生のための「保育」入門テキスト	共著	H24年3月	小田原女子短期大学	<p>担当部分：「第5章 実習の保育日誌」「第6章 実習の指導計画案」(p.119～p.136)を単著。 第5章では、学生が実習に取り組む上で、技術的にも時間的にも困難とされている保育日誌を書く作業の本当の意味を説くことを第一義においた。それは、将来の自分へのたからものとなるということである。日誌を書くことがすなわち葛藤の記録となりえる。そして自身、他者限らず、その記録を振り返ること(省察すること)で自身の成長へとつながっていくであろう。 第6章では、指導計画案のトライアングルと「どてま」の法則を知った上で指導計画案を作成することをすすめていった。前者においては、子どもの実態をまず捉えた上で、ねらいを構築し、そのねらいに基づいて活動内容が決定されるという流れを意識した上で作成するよう説明している。後者は単純に、学生が指導計画案を作成する上で忘れがちな、導入・展開・まとめの流れを意識からなくさないために私が考案した言葉遊びである。</p>
4. 教育・保育実習に役立つガイドブック	共著	H24年9月	大学図書出版	<p>担当部分：「Chapter7 子どもと生活」(p.28～p.31)を単著。 子どもたちは毎日どんな生活をしているのか、ある幼稚園の実態を通して、長くは一年間、短くは一日のスパンで紹介している。さらに、子どもの気持ちをより深く理解するための手立てを、年長児(5歳児)のレレーを見ていた年少児(3歳児)の事例も紹介している。この事例は実際に私が幼稚園で撮影した映像に基づいたものである。また様々な作品を制作していく過程で子どもたちがどんな思いで描き、作り、表現しているのか、それを探ることも大切であるということを説明した。</p>
	共著	H24年9月	大学図書出版	<p>幼稚園や保育所の保育者と養成校実習担当の教員が共に頭を悩まされている学生の実習の実情を取りまとめ、両者が歩み寄る教育・実習保育実習の在り方を提言するものとなっている。全85頁。 編：子どもから学ぶ実践研究会 代表：渡邊真一 編集委員：黒田眞喜子、吉濱優子、桃枝智子、山室吉孝 共著者：溝脇しのぶ、照沼晃子、榊原剛、山崎和子、山下佳香、堀内千津子、野津直樹、園田巖、朴淳香</p> <p>担当部分：「step4 健康と育ち」(p.56～p.64)を単著。 7つの事例を通して、学生が実習生として陥りやすい健康や学生の育ちに関する問題を紹介した。それぞれの事例について「養成校からのアドバイス」と「受入れ園からのアドバイス」として両者の思いを、両者の思いを知り得る立場の者として執筆した。また、事</p>

5. 幼稚園教諭・保育士のための実習ガイドブック	共著	H26年4月	大学図書出版	<p>例ごとにワークを設けて、その事例をより深く考えるきっかけづくりもおこなった。取り扱った事例は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分の体が心配 2 実習時の健康チェック 3 実習直前にひざを痛めてしまった 4 実習終了後に腰痛になってしまった 5 体を動かすことが苦手な実習生 6 実習クラスを替えてほしい 7 大人としての社会性が不足している <p>実習に挑む学生にとっての身近な「助っ人」として活用できるよう、それにふさわしい理論・実践の専門家によって書かれたテキストとなっている。全151頁。 監修：福本俊 編著者：福山多江子、田中浩二、大塚良一 共著者：駒井美智子、田中浩之、堀内千津子、綾牧子、加藤智、志濃原亜美、福田智雄、望月文代、野津直樹</p> <p>担当部分：「第4章 指導案の作成」(p.137～p.144)を単著。 幼稚園における指導案の書き方について紹介した。幼稚園において、どう子どもの実態を捉え、どう部分実習指導案・全日(一日・責任)実習指導案を書いていったのかを伝えた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子どもの実態を捉える 2 部分実習の指導案の書き方 3 全日実習の指導案の書き方
6. 保育・教職実践演習－保育理論と保育実践の手引き－	共著	H26年5月	大学図書出版	<p>保育・教職実践演習という科目だからこそ、保育現場で活躍した大学教員を集め、より保育現場の臨場感が伝わるようにという願いを込めて作成されたテキストである。全135頁。 編著者：横山文樹、駒井美智子 共著者：堤大輔、溝口武史、山本恵子、河合光利、守巧、仁藤喜久子、野津直樹</p> <p>担当部分：「第7章 総合的な実践を目指して」(p.87～p.102)を単著。 本学において保育・教職実践演習で実践してきた「模擬保育」について、その準備、実践、省察(意見交換会)の段階に沿ってわかりやすく執筆した。さらに、自身が幼稚園で経験してきた「幼稚園で誕生会の計画を立案する過程」を保育現場の臨場感が伝わるようにと願いを込めて執筆した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 模擬保育の準備、実践 2 模擬保育終了～意見交換会～ 3 理論と実践との結びつき～誕生会の計画を立てる～
7. 保育入門テキスト	共著	H27年3月	萌文書林	<p>同事項3を再編し発行したテキストである。 編：小田原短期大学 保育学科 監修：吉田眞理 共著者：内山絵美子、吉田収、上野奈初美、有村さやか、馬見塚昭久、金澤久美子、野津直樹、市野繁子</p> <p>担当部分：「Chapter7 子どもと生活」(p.30～p.33)を単著。 内容は同事項の3を参照。</p>
8. 生活事例からはじめる造形表現	共著	H27年4月	青踏社	<p>造形の基礎である素材の取り扱い方、表現技法から、それを保育現場で活かせるような造形活動、そして幼稚園での造形展という行事(実践事例)からより具体的な保育実践を学べる内容となっている。 編著者：宮川萬寿美、吉田収 共著者：野津直樹</p> <p>担当部分：「Ⅲ 実践編 造形展へ向けての活動」(p.116～p.134)を単著。 保育現場における造形展(作品展)が実際にどのように行われているのかを38枚の写真を入れながらわかりやすく執筆した。さらに、ある幼稚園の実践事例を用いて造形展の計画立案から準備、当日、片づけ、振り返りまでを時系列に沿って執筆した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 造形展の実際

9.子育て応援ブック	共著	H27年6月	小田原短期大学	<p>2保育実践との結びつき（造形展の計画立案）</p> <p>赤ちゃんを育て始めた保護者のための子育てヒント集として、小田原短期大学教員で執筆した。</p> <p>担当部分：「赤ちゃん快適に暮らす」（p.28～p.29）を単著。</p> <p>赤ちゃん（子どもたち）を取り巻く環境として「環境って何だろう」「子どもと地域の人たち」「どうして？なんで？」を大切の3つのポイントに絞ってわかりやすく楽しく学べるように執筆した。</p>
(学術論文) 1. 幼稚園教師のモチベーションを高める要因に関する研究	単著	H12年3月	玉川大学大学院修士論文	<p>研究目的：営利組織・非営利組織におけるモチベーションを高める要因に関する理論研究を検討し、その上で幼稚園教師のモチベーションを高める要因を明らかにする。</p> <p>研究結果：幼稚園教師の自己実現の欲求を満たすものは、幼児の発達過程を見届けることであると確認し、その意識を高める努力をすること、説得や研修などとおして、幼稚園教師に自らがモチベーションを生み出すという意識に気付くように働きかけること、教師同士、園長と教師などの「行動/対話」により築かれていく教師間の協力体制を整え、それを含めた幼稚園全体の教育環境を再検討すること、など。</p>
2. 幼児期にはぐくむ「生きる力」を先人たちや生き物に学ぶ体験保育	単著	H14年3月	厚木市教育研究所教育実践記録(平成13年度教育実践記録集第28集)	<p>幼児期に体験することの少ない「昔あそび」「かたりべ」慣習など、大人たちのノスタルジックな回想を踏まえ家庭、日常生活や幼稚園生活の中に復活させるとともに、先人たちの生き方から学ぶ体験保育を進めた。また自然環境の中で生棲する生き物の生活を観察し、動植物の生体や行動に関心を持ち好奇心や探求心を深め、「生きる力」を学び、豊かな人間性の創出に取り組み、自然に身につけ自ら学び、考える力を体得する体験保育を実践した。</p>
3. 家庭教育に関する調査研究	共著	H18年7月	厚木市教育研究所(平成17年度研究紀要第79集)	<p>厚木市内にある小・中学校、私立幼稚園、市立保育所に通う子どもの保護者を対象として、家庭教育に関する意識調査アンケートを行った。「家族のかかわり」「家庭の教育方針」「家庭のしつけ」「地域とのかかわり」について意識調査を行い、家庭における生活実態や保護者の家庭教育への考え方の現状把握をし、家庭の教育力の課題を明確にすることを目的とした。</p> <p>共著者：野津直樹、奥田七代、石川和子、鈴木努、服部弥生、大木信子、安藤淳、播間則代 全86頁。</p> <p>担当部分：「家族のかかわり」</p> <p>家族のかかわりについてアンケート設問の作成、アンケート結果の分析等を担当した。アンケート回答者（9割が母親だった）に対して子ども、パートナー、祖父母と過ごす時間、過ごし方、会話内容などを質問した。幼稚園・保育所の子どもを持つ親が「パートナーと過ごす時間は2時間未満」と答えた割合が5割以上というアンケート結果を受け、「早く帰る日を作ってみては？」という提言をした。また、アンケート内の自由記述欄をまとめる作業も担当した。</p>
4. 学生のための指導計画教授法（幼稚園）～実習、実践を見据えた確かな力をどのように培うべきか～	単著	H22年3月	小田原女子短期大学(研究紀要第40号)	<p>研究目的：学生にとってよりよい指導計画教授法を明らかにすることを本研究の目的とする。</p> <p>研究結果：経験に即した指導法は、より具体的でわかりやすい教授法であったようで、一定の効果はあったといえる。しかし、「指導計画の書き方」といった「how to」を教授することに傾倒していたため「指導計画を作成する上で基本的に知っておくべきこと」についての理解が学生に定着するまでには至らなかった。</p> <p>指導計画の書き方を専門的知識・技術と考えるのなら、この部分においては、指導計画についての専門的知識・技術を習得できたといえる。しかし、それ以外の部分（指導計画を作成する上で基本的に知っておくべきこと）についての理解の定着が望まれる。さらに、他科目との連携を図りながら、理解が不足している部分について補填していきたい。</p> <p>私の指導計画教授法において「指導計画の書き方」以</p>

5. ひろば活動の 実践を通して指 導計画を作成す る試み	単著	H22年9月	全国保育士養成協 議会第49回研究大 会発表論文集	外の部分が学生に伝わったかどうかは疑わしい。学生が指導計画を「作成できる」状態へと導くことだけに固執せずに「指導計画を作成する上で基本的に知っておけなければならないこと」についての理解を定着した上での指導計画作成へと導きたい。 「教育実務演習」授業内における私が担当する学生グループでのひろば活動の実践を通しての指導計画を作成する試みを紹介した。この時点で進行中だったため、来年度にまとめを継続研究として発表する予定であった。
6. ひろば活動の 実践を通して指 導計画を作成す る試み その2	単著	H23年9月	全国保育士養成協 議会第50回研究大 会発表論文集	前述5.の継続研究として「教育実務演習」授業内において、学生グループでのひろば活動の実践内で指導計画を作成する試みのまとめを発表した。
7. 本学学生が持 つ「保育者のイ メージ」の変遷 についての研究	単著	H24年3月	小田原女子短期大 学(研究紀要第42号)	研究目的：保育者論を受け持った3年間（平成21年度～23年度）において、学生一人一人による保育者のイメージの変遷をたどることで、私が提示したキーワードのうち最重要ワードである「葛藤と成長、省察」が学生にどれほど定着しているのかを探ることを目的とする。 研究結果：様々なデータを分析し、それらを総合して考えると、1年次前期に「保育者論Ⅰ」、2年次後期に「保育者論Ⅱ」を開講すべきということを提言。
8. 保育環境に関 する一考察～砂 場での遊びを考 える～	単著	H25年9月	全国保育士養成協 議会第52回研究大 会発表論文集	園環境としての砂場について考え、砂場での子どもの遊びを記録し、記述し、論考することで「砂場での子どもの遊び」と「学生の砂場での遊び経験（体験）」を関連付けていく発表をした。
9. 保育環境に関 する一考察（そ の2）～砂場 での遊びを考 える～	単著	H26年3月	小田原女子短期大 学(研究紀要第44号)	研究目的：園環境としての砂場について考え、砂場での子どもの遊びを記録、記述、論考することで「砂場での子どもの遊び」と「学生の砂場での遊び体験（経験）」を関連付けていくこと。 研究結果：記録に登場する頻度が多い子どもyについて、その砂場での遊びを抽出することで、本研究者が見慣れない大人から本研究者個人へと変容する段階を経た後、より強く本研究者と関わりたいという気持ちにまで昇華したと推測できた。さらにはyにとって砂場とは自立して待つことができる場であると同時に一緒に誰かと遊ぶことのできる依存の場であることも導くことができた。これらは、4月から11月までの映像記録を記述化することでしか見えなかったyの心の動きである。そして、こういった分析の蓄積こそが本研究者の求める唯一の知識の源泉であり、この知識の源泉が本研究に基づく先の研究における最終的な到達点である、学生への寄与へとつながると確信した。
10. 子どもが環 境と出会う時の 保育者のかかわ りの実際 ～保育現場から 生まれる「環境 ブック」を作成 する試み～	単著	H26年9月	全国保育士養成協 議会第53回研究大 会発表論文集	研究目的：園生活における保育の一瞬の記録収集を行いながら（その記録には保育者の子どもたちへのかかわりも含める）、次の2つを研究の目的とした。 ①保育の一瞬における保育者の子どもたちへのかかわりをまとめた「環境ブック」を作成し、それをまずは本学学生に提示する。 ②保育の一瞬における保育者の子どもたちへのかかわりを、記録収集した保育者ととともに省察を行うような一つの園内研修モデルを提案する。 研究結果：研究の目的①としては、同年11月19日の研究大会に向けての研究発表として準備を進めた。そこでは途中経過を報告する形をとった。研究大会で得た知見をもとにより良い環境ブックを作成していく予定とした。完成した環境ブックは、本研究者が担当する環境指導法や保育者論で本学学生へ提示する。研究の目的②としては、上記研究大会後の研究部会の中で取り組んでいく予定である。
11. 地域子育て ひろばを活用し た乳幼児家庭全 戸支援(1)～小 田原モデルの研 究と試行～	共著	H27年3月	小田原短期大 学(研究紀要第45号)	担当部分：「4.保護者向けテキスト作り (5)赤ちゃんと暮らす ③子どもと環境がかかわるということ」(p.58～p.59)を単著。 子どもにとってより身近な環境として、人、物、自然、社会の4つの環境を題材としながら、子育て中の保護者にとってわかりやすい執筆を目指した。 1 環境って何だろう？

12. 保育者としての葛藤と成長を知るためのインタビュー調査	単著	H27年9月	全国保育士養成協議会第54回研究大会発表論文集	2子どもと地域の人たち 3「どうして?」「なんで?」を大切に 研究目的:大学を卒業した学生が保育者となった時に、保育者としての葛藤の在り様、そしてその葛藤をもとにした成長の在り様が実際にどういったものであるのか、そのリアルを知ることを目的とした。
(その他) 1. 2.		年 月 年 月		
その他 (表彰等)				